綱　領
われわれJAYCEEは社会的・国家的・国際的な責任を自覚し志を同じうする者、相集い、力を合わせ青年としての英知と勇気と情熱をもって明るい豊かな社会を築き上げよう。

JCI 福島JCニュース
FUKUSHIMA JUNIOR CHAMBER OF COMMERCE
═福島青年会議所新聞═

福島青年会議所新聞
WEB版
Vol.508
発行責任者　今野　陽介
編集責任者　伊藤　大地
発行日：2019年1月

2018年度　事業報告

理事長　今野　陽介

■一年を振り返って

1963年7月、福島青年会議所は「集え、若き獅子たちよ」のスローガンの下設立されました。創始の精神は、先輩諸兄から英知と勇気と情熱をもって連綿と受け継がれ今日に至ります。創立55周年を迎えるにあたり脈々と紡いでこられた歴史を振り返るとともに、これからの未来に向かって躍動する年として活動して参りました。

■創立55周年を迎えて

福島青年会議所は、2018年7月に創立55周年を迎えました。今まで半世紀を超える長きにわたり、先輩諸兄の運動はもちろん、地域の皆様、会員一人ひとりに関わる会社・社員、家族など、全ての方々のご理解、ご支援があったからこそ運動を継続することが出来ました。内外からの多大なる支えのもとに歴史を紡いでこられたことに「感謝報恩」の精神で、その情熱を表す創立55周年記念事業、記念式典を創り上げ、300名弱の皆様と共にお祝いをすることが出来、これからの未来への決意を発信致しました。また、当日に次代に繋がる記念誌を配布し、これまで携わった皆様と共有することが出来ました。

■会員拡大　志を同じうする者

自己研鑽と同時に明るい豊かな社会の実現を目指すという高い志。最終的に実現したいと目指すものが「目的」、その目的を達成するために具体的に設ける目印が「目標」であり、「志」とは公共性を携え心に思い決めた信念です。志を同じうする者、その「同志」を得る為に、着実に魅力を伝播して参りました。結果、一人でも多くの方々に門戸を開き、13名の新たな仲間を迎え入れ、共に成長する機会を創出致しました。

■愛する我らが故郷（ふるさと）のために

福島ならではのソーシャルストック、信夫山の魅力を最大限に発信することで、市民が故郷に誇りを待ち、郷土愛が醸成される事業を展開して参りました。また、安心安全なまちづくりの一翼を担うべく、福島市社会福祉協議会との連携を密にし、防災訓練に参加するなどして、会員同士の災害支援に対する意識の変革に尽力しました。

■未来を担う子ども達へ

福島の明るい豊かな社会を担うのは、今の子ども達であり、地域活性化のためには若年世代の人口流出を防がなければなりません。それには先ず故郷である福島に生まれ育ったことに誇りを持てる社会にしていく必要があります。そして、この福島に住み暮らしたい、そう感じてもらえるよう魅力を発信し郷土愛を育む事業を展開致しました。無限の可能性を秘めた子供たちが将来に向かって一歩前へ出る勇気を持ち、大きな夢を描くために、「わらしっ子塾」事業を親子と共に参加して頂き、夢を叶える原動力となる志を創出しました。また、健全な心身を育むために、「わんぱく相撲」を開催し、夢と希望をもつ大切さとグッドルーザーの精神を涵養することが出来ました。未来を担う子ども達が、

郷土愛に溢れ、夢を描ける故郷の実現を叶えるべく邁進して参りました。

■愛郷心育むまつりを内外に発信

昨今、福島のまつりと言えば「福島わらじまつり」と、全国のみならず世界にも発信する場面が増えて参りました。この好機を活かし、福島の魅力を全国各地、世界に発信するという志で積極的に参加致しました。また、福島のシンボル信夫山から派生している暁まいりやわらじまつりを通して、関わりのある団体・コミュニティとのご縁を大切にし、積極的に交流を図りました。さらに、わらじ作りを通して、地域のシンボルとしての「福島わらじまつり」を市内外に浸透させることも命題に掲げ伝播しました。そして、年間を通してまつりを今まで以上に大人から子供まで多くの市民が参加していけるよう取り組み、より故郷の文化・伝統に誇りを待ち、郷土愛を育むことの出来る機会とすることが出来たと自負しております。

■堅実な LOM 運営と福島青年会議所の浸透力

節目となる本年、今一度気持ちを新たに会員一丸となって堅実な LOM 運営に向けた取り組みをして参りました。また、新入会員を迎え拡充していく中においては、常に会員個人の知識を深め、資質向上を図る事は必須です。例会を通して、人財教育から組織充実を図りました。さらに、我々が行っている青年会議所活動の内容と運動の志を SNS や NCV 様など外部からご協力頂きながら様々な媒体を通して少しでも多くの方々に伝播していくことで、価値を最大限に引き上げることが出来ました。また、堅実な LOM 運営と会員の人財教育が会の礎となり、対外へ運動を広く発信することで運動の浸透力を高めることが出来ました。

■未来を描く一年に

青年会議所運動が最大の効果をもってまちの発展に寄与するために、将来への中期的な運動指針（60 未来ビジョン）を策定し、より幹のしっかりとした骨太な運営体制を確立して参りました。

■結びに

私自身、歴史を振り返り、新たなる一歩を踏み出すこの機会に、個として、会として感謝報恩の精神を宿し、己を律する土台の上に、「楽しくなけりゃ JC じゃない」という心待ちで躍動する一年とすることを命題に掲げ活動して参りました。年間を通して、どれだけその背中を見せることが出来たかは分かりませんが、何よりメンバーの一人ひとりが私の想像を超え、まさに躍動する若き獅子（志士）たちとなって、自ら楽しんで取り組み、私の掲げた職務分掌以上により良いものを作り上げようと悩みながらも切磋琢磨して今年度の我々の運動を更に高い次元に引き上げてくれたと感じています。全てのメンバー、そして我々を支えてくださった全ての皆様のおかげで、一年間重責を全うすることが出来たと心から感謝申し上げます。これからも私はこの大恩に報いるべく「感謝報恩」の精神で故郷を、そして福島青年会議所を最大限に発信し、郷土愛に溢れ、躍動出来るまち福島を実現するべく活動して参ることをお誓い申し上げます。一年間、本当に有難うございました。

優しくある為に強くあれ
我々が率先して躍動することで未来を切り拓く
全ては愛する仲間と誇りある福島の為に

事務局

専務理事　遠藤　武義　　事務局長　石郷岡　武　　財政局長　菅原　正裕

2018年度、今野陽介理事長のもと、事務局をお預かりいたしました。また、日本JC、東北地区協議会、福島ブロック協議会と連携し、運動を発信いたしました。本年は創立55周年の年ということで、周年関連事業においては、会員の皆様には多大なるご協力をいただき、素晴らしい記念すべき年になったことと思います。また、各種大会等におきまして、登録の面でご協力をいただきまして誠にありがとうございました。

事務局としては、理事長のセクレタリーをはじめ、各種会議の準備や出欠の確認、資料の配信などに対応し一年間行動してまいりました。

また、財政局に関しましては、１年を通じ財政審査会議を開催し、事業の公益性の確保と、予算の健全性に関する審査を実施してまいりました。

理事各位のご協力、監事の監督のもと、適正な会議運営を行うことができました。

三役、理事並びにメンバーの皆様による多大なるご支援とご協力により１年間無事に事務局・財政局業務を終了することができましたこと、深く感謝いたします。

そして、事務局員である渡邊真由美さんには本当にご苦労をおかけしましたが、事務局・財政局、そして会全体を下支えくださいましたことに心より感謝申し上げます。

一年間、本当にありがとうございました。

会員拡大委員会

委員長　番匠　啓太

委員長が５月より休会となり、委員会として全く機能できず、悔しい１年間であった。

委員会メンバーに対しては、運営もうまくいかず、大変申し訳ない気持ちでいっぱいです。

しかしながら、目標には達しなかったが、多くのメンバーに助けられ、なんとか13名の新たな仲間を迎えることが出来た事で、最低限の担いは遂行できたのではないかと思う。

また、委員会が機能しないことで、ＬＯＭ全体で拡大活動に携わる意識が芽生え、結果として例年並みの拡大を行うことが出来たため、当初の目的である全員で拡大運動を行うという事を実践できたのではないかと思う。全員で拡大運動を行えば委員会が無くても拡大は可能であるという、希望を示せたのではないかと思う。

なんとか１年間委員会を維持運営することが出来たことは感謝しかありません。１年間ありがとうございました。

福島まちづくり委員会

委員長　佐藤　充孝

本年度、福島まちづくり委員会では、「未来へつなぐまちづくり」のスローガンのもと一年間活動してまいりました。５月には、第６回信夫山パークランニングレースを開催し、全国各地より目標の1,200名を超える方にご登録いただきました。今年は走るだけでなく、信夫山の名所を歩いて回る「名所散策コース」を導入し、年配の方や親子など大勢の方にご参加いただき、ランニングへの参加者も含めて、福島市のソーシャルストックでもある、信夫山の持つ歴史、伝統、自然の魅力を再認識・発見していただくことができました。また、信夫山の観光資源としての価値がさらにあがるように、全国植樹祭に併せて「森林とのきずなづくり植樹リレー」を実施し、参加者と共に桜、シバザクラの植樹を行いました。さらに本年は信夫山の御神坂にも桜の植樹を実施しました。

他にも、４月例会においては浦部博氏を講師としてお迎えし、講演会を通じて福島市のソーシャルストックである信夫山の持つ歴史、伝統、自然の魅力を再認識・発見することをできました。また、平成最後の福島とうろう流し花火大会においては、とうろうで「成」の字をしたためました。お越しの方が「成」の字と花火のコントラストを写真に撮る姿もみられ、お越しいただいた方々が新たな時代に向けて成就したい想いや願いを込める機会に少しでもなれたのではないかと思います。

さらに福島市社会福祉協議会と福島市総合防災訓練に参加し、連携を深めることができました。。

どの事業も準備等大変ではありましたが、委員会メンバー、福島青年会議所のメンバー、ＯＢの皆様のご協力のおかげで滞りなく無事終了することができました。一年間本当にありがとうございました。

福島ひとづくり委員会

委員長　芳賀　　眞

第31回わんぱく相撲福島場所では、６名の参加者が集まり無事に開催されました。年々参加者が減少していますが、今年は新たに伊達相撲協会の方々や伊達青年会議所の方と連携をとりより多くの参加者が募るように尽力してまいりました。次年度に向けてより良い関係を築けたと思います。今後、相撲のカルチャーがもっと多くの子ども達に広がっていくことを切に願いながら、少しでも力になれるようこれからも応援してまいります。

第27回わらしっ子塾花火づくり体験、新規事業となった今回の青少年育成事業ですが、子ども達が家族と過ごす時間を増やし花火づくりを通じて家族で一生の思い出を作れました。参加された家族が一緒になって花火づくりを笑顔で楽しそうに経験してる姿を見て、事業を開催して本当よかったと思いました。

打ち上がった花火は本当に綺麗で、参加者にとってかけがえのない時間になったと思っています。この経験を大事に、今後の人生に活かしていきたいと思います。

第３回ふくしま未来塾では、竹あかりづくりを通じて、講師のCHIKAKENさんからお話を聞き、夢や将来のビジョンを創造していく事業となりました。全国で活躍中のCHIKAKENさんから、街や村に灯りをともし地域の方々と竹あかりを通じてまちづくりをしていくなど、「やりたいことを型にしていく」大切さを学ぶことが出来たと思います。参加された高校生・大学生が真剣になって意見交換し自分の将来のビジョンを少しでも創造できた時間になったと思います。これからの人生より多くの時間を青少年育成事業に関わっていきたいと思いました。

１年間福島ひとづくり委員会委員長として、貴重な経験と頼もしい仲間ができたことに感謝の気持ちでいっぱいです。これからの福島青年会議所の益々のご活躍とご多幸をお祈り申し上げます。

福島まつり継承委員会

委員長　福井　　誠

本年度は、福島のために・・・やったれ！そして、やったる！」をスローガンに委員会を運営して参りました。

第６回暁まいり福男福女競走では、多くの会員メンバー、関係諸団体の皆様より多大なるご協力を頂きました。また、昨年の数を上回る企業様、個人様よりご協賛を頂きました。感謝申し上げます。昨年は初めてテレビ CM を採用し、462 名の参加者を集めることが出来ましたが、今回はテレビ CM 無しでの事業告知となり、昨年の参加者数を超えることが出来るか正直不安でした。しかし、継続事業という事もあり口コミで話題に取り上げられたこと、市役所様と連携し市内全ての小中学校にポスターを配布出来たこと、そして、福島ユナイテッド FC 様をはじめ保健福祉センター様など団体での参加登録を頂けたことで過去最高となる 500 名の参加者を集めることが出来ました。これにより、広報に予算をかけなくても十分に伝播力のある知名度の高い事業だという事が実証できたと思います。さらに、民報４社はもちろん、NHK や NCV ケーブルテレビでも事業の様子が放映され、NCV 様に関しては YouTube にてタイムリーに事業の様子がアップされました。マスコミ各社にて特集まで組んで頂き、昨年以上の放映時間だったことも本事業の話題性を象徴する結果だと思いました。また、今回の事業内容については暁まいりの由来を知って頂くために、わらじを持って走ることで健脚祈願を表現し、福男福女が米俵を担ぐことで五穀豊穣祈願を表現させて頂きました。そして、カップルで手を繋いで競走してもらう事で縁結び祈願を表現させて頂きましたが、昨年カップルで参加されたペアが今年はめでたく夫婦となり参加して下さいました。参加者アンケート結果では９割の参加者から理解できた、興味が出たとの回答を頂いており、事業目的が十分に達成され、事業が大成功だったと確信しました。

出張わらじつくり体験教室においては、当初５校の予定が３校に減ってしまったことは大変残念に思いますが、次年度以降、告知方法や参加推進方法を見直すことでさらなる素晴らしい事業に発展していくことと確信します。今回、事業に参加された子ども達は真剣な表情でわらじの制作に取り組んでいました。また、完成したわらじを履いて大きな声で「わっしょい」と掛け声をかけながら小わらじを担ぐ様子を見て、福島を代表するまつりである「わらじまつり」を肌で感じ、わらじ文化をより深く体験できたものと思います。各小学校から感謝の手紙を頂戴し、この事業の素晴らしさを実感することが出来ましたし、学校側から毎年授業の一環として取り入れたいとの声もあり、地域にとっての必要性も感じることが出来ました。今回多くのメンバーに講師としてご協力頂き、事業を大成功に導くことが出来ました。

第 49 回福島わらじまつりで開催されたわらじ競走では、今回は参加チームが大変多く、レースのタイムスケジュールがかなりタイトでしたが、メンバーの皆様のご協力を頂き、時間内に無事終えることが出来ました。初参加のチームも増え、わらじ競走が広く市民の皆様へ広がっている結果だと感じました。時間制限がある中、今以上に参加チームを増やしていくことは難しいと思いますが、レース自体の中身を濃くしていければ、より盛り上がるわらじ競走になっていくと思います。今回のアンケートで「来年も参加したい」と答えてくれた方が９割を超え、来年節目を迎える第 50 回わらじまつりにつなげることが出来たと確信しました。最高の天気とかつてないほどの多くの参加チームに恵まれ、本事業を大成功に終えられました。

１年を通して当委員会の全ての事業に賛同いただきお手伝い頂いたメンバーの皆様、関係諸団体の皆様に心から感謝を申し上げます。次年度もやったれ！やったる！

総務広報委員会

委員長　伊藤　大地

本年度総務広報委員会としては、新たな試みとして「広報」事業を特にSNSやデジタルコンテンツを中心に行った年となりました。委員長として、デジタルに精通した知識が豊富であったわけではなかった為、一年間悩み奔走しました。ほぼ全事業に参加し、情報取得や発信を行いましたが、結果としては、大した効果を上げることは出来なかった初年度となりました。今後ブラッシュアップを行い、時代に即した効果的な広報手段になることを祈念しております。

総務として例会の設営に関しては、例年通り1月の例会・新年会から始まり、12月例会・卒業式まで、長距離走選手のようにスタミナの必要な委員会であったと改めて感じます。今年度の総務広報メンバーは総務歴の長いメンバーが揃い、運営に際して的確なアドバイスと、実務的にきめ細やかなサポートをいただいたおかげで、1年間を乗り切ることが出来たと思います。このメンバーでなければ成しえなかった、素晴らしい今年度メンバーに改めて感謝申し上げます。また全メンバーのご協力、1年間ありがとうございました。

55周年実行委員会

委員長　渋谷　崇司

記念式典担当理事　大和田　諒　記念事業担当理事　菅野　太喜　記念誌担当理事　阿部　敏幸

福島ＪＣにおける周年は、５年刻みで行っているが、継続事業というよりも、全てが新規事業の為、計画段階でどれだけ想像を膨らませ、そして具現化出来るかを追求することがポイントであると考えている。その為には、予定者の段階で理事長の所信を委員会としてしっかりと浸透させ、決してぶれることのない意識の構築が何よりも重要である。55周年実行委員会は、３名の担当理事が、その重要な部分を全て実行出来たからこそ、大成功に終えることが出来たものと考える。

感謝報恩、そして未来へ
～躍動せよ若き獅子たち～